

か も 市 史 だ よ り

平成28年10月
No.34

◆編集発行 加茂市幸町二丁目3番5号 加茂市教育委員会内市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480



▲ 拝殿の外観



▲ 上棟時の古写真



▲ 拝殿の内観 格子戸の奥が本殿・弊殿

中興野 大日靈神社の建築

なか ごう や
おお ひるめ じん
じや

大日靈神社の建築は昭和十六年（一九四一）八月の竣工です。拝殿は入母屋造、向拝一間が付く平蔵殿が建っています。本殿は幣殿の最奥部に祀られ、板扉によつて仕切られています。天井は弊殿・拝殿ともに格天井で、幣殿は華麗な絵画で装飾しています。

建築は姿がよく、全体に均整がとれ、細部の意匠も充実しています。特に拝殿の軒廻りは二軒平行繁極で、軒の仕様としてはもつとも上等な手法を採っています。通常、背面側の軒は簡略にすることなくありませんが、この拝殿はまったくそれはありません。正面の向拝も、軒は打越極の先に飛檐極を付ける正統な様式で、拝殿の軸組も本格的です。拝殿は正面・両側面の三方に縁を廻し、高欄組もよく整っています。樹種は杉・松が主で、よく吟味された良材です。

大日靈神社が竣工した昭和十六年八月は、外交上極度に緊張した情勢にありました。こうした社会環境が、簡素で厳しく、省略のない造形に反映されたものと思われます。拝殿には上棟時の古写真が残り、当時の気風を伝えています。小規模ながら見どころの多い、秀逸な建築作品です。

大日靈神社の建築は昭和十六年（一九四一）八月の竣工です。拝殿は入母屋造、向拝一間が付く平蔵殿が建っています。本殿は幣殿の最奥部に祀られ、板扉によつて仕切られています。天井は弊殿・拝殿ともに格天井で、幣殿は華麗な絵画で装飾しています。

建築は姿がよく、全体に均整がとれ、細部の意匠も充実しています。特に拝殿の軒廻りは二軒平行繁極で、軒の仕様としてはもつとも上等な手法を採っています。通常、背面側の軒は簡略にすることなくありませんが、この拝殿はまったくそれはありません。正面の向拝も、軒は打越極の先に飛檐極を付ける正統な様式で、拝殿の軸組も本格的です。拝殿は正面・両側面の三方に縁を廻し、高欄組もよく整っています。樹種は杉・松が主で、よく吟味された良材です。

大日靈神社が竣工した昭和十六年八月は、外交上極度に緊張した情勢にありました。こうした社会環境が、簡素で厳しく、省略のない造形に反映されたものと思われます。拝殿には上棟時の古写真が残り、当時の気風を伝えています。小規模ながら見どころの多い、秀逸な建築作品です。

『宗門人別改帳』からみえる村

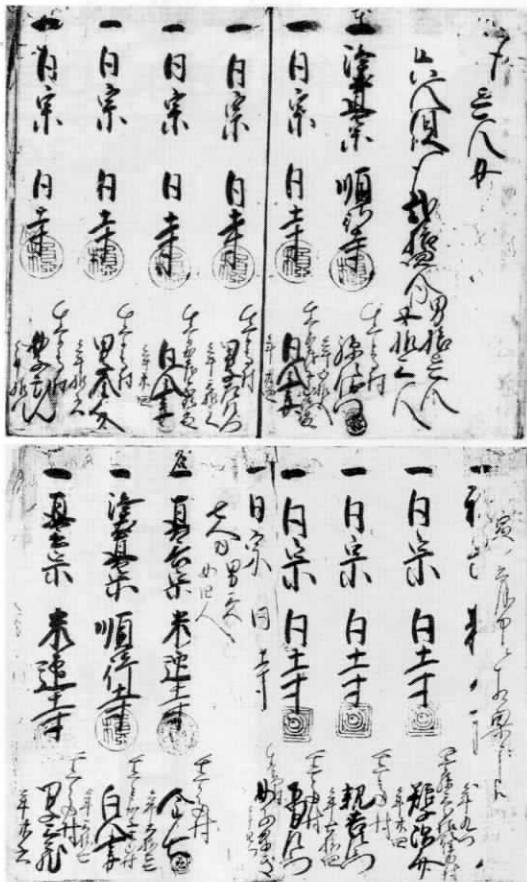
江戸時代には、毎年春一人ひとりの檀那寺や性別・年齢などを記した「宗門人別改帳」が作られました。帳面を分析すると、庶民の生活と慣行がみえてきます。

江戸時代、キリスト教を取り締まる必要から、人々はいすれかの寺院の檀徒となり、檀那寺はキリシタンなど幕府禁制の信徒でないことを証明しました(寺詣制度)。村々では宗門改めが実施され、その結果をまとめた宗門人別改帳(宗門人別帳)が旨人別帳(ともども呼ばれます)が村ごとに作されました。そこには各寺院の檀家の家族や奉公人など、村の住民すべてが記載され、戸籍の役割も果たしました。

宝永七年(一七一〇)の「鶴森村宗旨御改帳」(中鶴森西方勝男氏所蔵)をみてみましょう。この帳面には七九軒の家族、四九〇人(男二六〇人・女二三〇人)の名前が記されています。最初に書かれている家は新発田藩鶴森組大庄屋の西方勘藏家です(新発田藩では十数か村をまとめて組とし、行政の単位としました。市域では鶴森組と加茂組がありましたが、妻は村松町(五泉市)から嫁いで来たことがわかります)。

七九軒のうち、当主が独身の家は一二軒です。いっぽう息子・娘夫婦や、隠居した両親と同居している家が二六軒あるので、村内で九三組の夫婦が確認できます。最も多いのは鶴森村の住人同士の結婚で五五組で

た)。西方家は男五人・女七人の一二人で、乳母一人・手代一人・下男一人・下女三人も含まれています。



▲ 「鶴森村宗旨御改帳」(上下とも)

表1 鶴森村の夫婦内訳

(単位は組)

夫婦ともに鶴森村	55
夫が他村から	11
妻が他村から	19
夫婦ともに他村	7
出身村不明	1
合計	93

一 同宗 同寺	生所村松町	一 禅宗 耕泰寺	生所当村 勘藏
	年三拾九	同人妻	年三拾四

右のように、宗門改帳には各人の宗派・檀那寺・性別・年齢に加えて出生地も記されています。西方勘藏は当村すなわち鶴森村の生まれですが、妻は村松町(五泉市)から嫁いで来たことがわかります。

近隣の前須田村や田中新田など鶴森組内の村々や、他領でも村上領戸頭村(新潟市南区)や次新村(燕市)など信濃川左岸の村々から配偶者を求めていることがわかります。いっぽう対岸の加茂組の村々からは少数

表2 鶴森村夫婦の他村出身者

鶴森組	前須田村(夫3人・妻1人) 後須田村(2・2) 大嶋新田(1・2) 田中新田(1・3) 砂押新田(0・1) 北潟村(0・1) 井戸場新田(1・1) 兎新田(1・0) 萩島新田(1・0)
加茂組	加茂町(0・2) 吉田新田(1・0) 山嶋新田(0・2) 湯川村(1・0) 不明(0・1)
その他	中之島組今町(1・0) 丸山村(1・0) 戸頭村(0・1) 庄瀬村(0・1) 木山村(0・1) 十二道島新田(1・0) 保内村(1・1) 村松領中川村(1・1) 佐渡村(0・1) 坂井村(1・0) 小吉村(0・1) 次新村(0・1) 村松町(0・1) 不明(1・1)

複数の夫婦が生家の檀那寺を続けることがわかります。

『公立加茂病院』と 『加茂獎健寮』の発足

県立加茂病院の発足は昭和十八年（一九四三）です。しかし、明治時代にも「加茂病院」と称した病院がありました。

明治時代の加茂病院は、加茂町と南蒲原二十二か村（狭口村・上条村・下条村・加茂新田などの加茂組と田上組の村々）の連合によつたもので、「公立加茂病院」と称されました。開院は明治十四年（一八八一）七月一日で、翌日より「患者が陸續と詰め掛けた」と新聞は報じています（『新潟新聞』明治14・7・3）。

開院から四年目の明治十七年、公立加茂病院は閉院します。

▲ 公立加茂病院の開業と廃止を報ずる記事（『新潟新聞』明治14・7・3、同17・8・1）

○ 南蒲原郡加茂病院へ去る二十二日開院し當日ハ郡長より三種病院監視員原氏も臨席された。院長ハ元々二姓病院員石田氏にて開院の翌日より就任して、患者の詰掛けるので醫務課氏へ嘆忙のよしかりたり。

その理由ははつきりしませんが、新聞は「種々の苦情もありて」と報じています（『新潟新聞』明治17・8・1）。松方デフレの影響で、町村が負担金を貯えなくなつた事情が考えられます。

その後、加茂町に公立病院設立の動きが起こるのは戦時中のことでし。日本医療団は、戦時体制が強まる昭和十七年制定の国民医療法に基づき結成された団体です。開業医を基礎とした医療体制のもと、無医村をなくし、公的医療機関を各町村に配置しようとしていました。昭和十八年十二月一日、その適用を受け、日本医療団新潟支部加茂獎健寮が誕生します。本館は井田医院（新

町）跡に設け、当時廃業していた料亭萬屋（谷通り）を別館にあてました。入院には、市町村長経由で医療団宛てに願書を出すとされました（「昭和十八年加茂町事務報告書」）。

しかし、加茂獎健寮の設置によつても、町の医療不足は解消されませんでした。昭和二十一年七月一日、加茂獎健寮は日本医療団加茂病院と改称されますが、貧弱な医療体制は変わらず、当町の医師は全国平均を大きく下回る人口二千百人に一人に過ぎませんでした。また衛生状態も悪く、「県下で最も不健康地」などという声も挙がり、町会で問題にされました（「昭和二十二年」加茂町会議事録）。

昭和二十四年十一月、日本医療団は解散となり、病院は県に移管され、名称も新潟県立加茂病院に変わりました。しかし、ベッドは二〇床に過ぎず、十分な医療にはなおほど遠い

▶ 谷通り時代の加茂病院『加茂病院改築十五周年記念誌』より。加茂病院の青海町移転後は看護婦宿舎等に使われた。



三、健民修練所事務取扱状況	
昭和十八年度國民体力検査、結果新潟縣坂町健民修練所へ	○ 南蒲原郡加茂病院へ去る二十二日開院し當日ハ郡長より三種病院監視員原氏も臨席された。院長ハ元々二姓病院員石田氏にて開院の翌日より就任して、患者の詰掛けるので醫務課氏へ嘆忙のよしかりたり。
入所人員	二十七人
入所期間	自昭和十八年十月一日至昭和十八年十一月一日
四、獎健寮事務取扱状況	四十二日間
五、定期検査	ルモ十三件

▲ 加茂獎健寮の初年度事務報告
18年12月分の事務内容の記載がある。

のが実情でした。そこで二十五年一月、加茂町及び周辺七か村（下条・須田・田上・庄瀬村など）で、坂内龍雄加茂町長を会長に、「県立加茂病院新築移転期成同盟会」が結成されました。運動は盛り上がり、昭和二十七年五月、青海町に新しい加茂病院が誕生します。昭和四十五年三月には改築され、二四〇床、六階建ての総合病院となつて、地域医療を支え続けています。



▲ 加茂朝学校の校舎（昭和4年竣工）

加茂朝学校の校舎建築

大正九年（一九二〇）創立された加茂朝学校はしばらく独立校舎がなく、大昌寺（松坂町）の本堂を仮校舎にして教育活動をしていました。

校舎の建設が具体化したのは、昭和に入つてからでした。昭和三年から翌年にかけ、校長の西村大串を始めとする教職員が日夜募金活動を始めました。三年十二月には建築業者が決まり、翌年二月には加茂町会へ建築費補助の請願が出て可決され、三月一日には大昌寺の境内で莊厳な地鎮祭が営まれました。

就業時間を経て夜七時から再度机に向かう生徒と同校の教育はこぞつて称賛されました。とりわけ、宮内省から視察に訪れたある官僚は、「眞人間はああいう学校に出来るであろう」と絶賛したといいます（『新潟新聞』昭和9・7・7）。

昭和三十九年に校長に就任した金田綱雄は、手狭になつた大昌寺から学校町へ学園を移転・新設する計画を推進します。その際、自ら募金に奔走した経験から、旧校舎は移築保存し、記念館にする構想を立てました。しかし、新制高校（加茂暁星高校）へと昇格を果たしていた学校は昭和四十年代の生徒急増期を迎えて、この校舎は教室や部室、さらに新潟中央福祉専門学校の校舎としての利用を余儀なくされ、記念館構想は実現をみませんでした。

本校舎は、歴史ある加茂暁星学園のなかでも、学校発展に尽くした人たちの精神と功績を伝えるとりわけ重要な遺構となっています。

（民俗部会 中山 勇）

▲ 学校前の道路での消火演習 昭和初期
（写真集『青海八十年』より）

加茂農林学校生徒の消防活動

新潟県立加茂農林学校では、明治三十六年（一九〇三）の創立時より年に数回、消火活動を中心とした防災演習が行われていました。また寄宿舎（原則として生徒全員が寄宿舎生でした）では、災害に備えて、深夜に予告なしの臨時召集訓練も行われていました。実際に生徒達は、町内の火災等に出動して消火活動の一翼を担つていたのです。その活躍の様子を、当時の新聞が伝えています。

明治四十五年四月十六日夜に、五番町の土手通りで発生した火災は、強風の影響で二百余戸を焼失する大災害となりました。駆けつけた消防団の中でも、同校生徒は教職員の指揮によつて、最も規律ある消火活動を行つたとして警察や町民から感謝されました（『新潟新聞』明治45・4・18）。

大正七年七月十日未明、五番町の本量寺大門の民家からの出火は、連日の猛暑による乾燥で、瞬く間に燃え広がり一三七戸を全焼する大火となりました。深夜にもかかわらず三四〇余名の生徒達は、学校備え付けのポンプを運んで駆けつけ、猛火の中消火活動を行いました。生徒達のめざましい活躍によつて、火元と隣接した第一尋常小学校（現加茂南小学校）への延焼を食い止めることができ、町民から賞賛されました（『新潟新聞』大正7・7・11）。

生徒による地域の消火活動は、戦前まで行われていました。戦後、新制高校となつてからも、昭和末期までは本格的に防災服を着用しエンジンポンプを使って消火演習を実施していました。

（近現代部会 高橋雅弘）

● 加茂町の大●
▲ 損害約十五萬餘圓
▲ 焼失戸數二百餘戸
天亦く焼けるを見たり、聞けば加茂町に一轟列車に投じて加茂の罹災地に向ふ
一轟左に其跡地を報道せん

▲ 生徒の活躍を報じた記事（『新潟新聞』明治45・4・18）